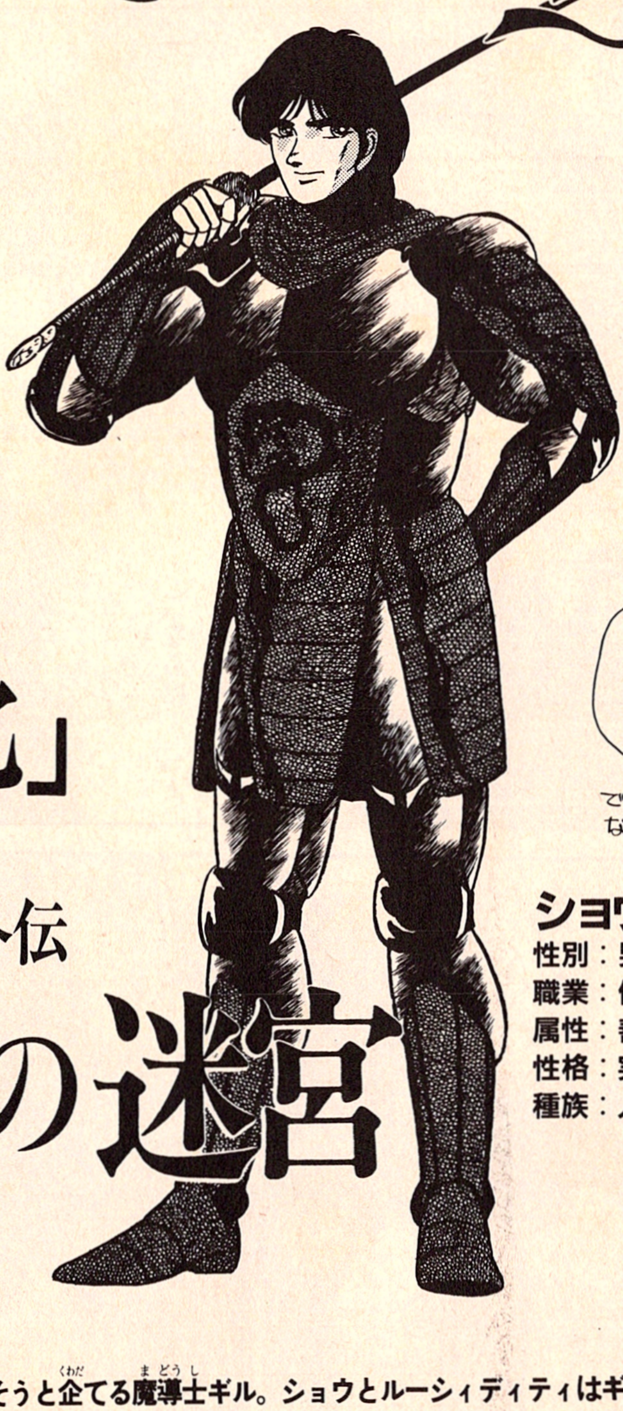
Wizardry®



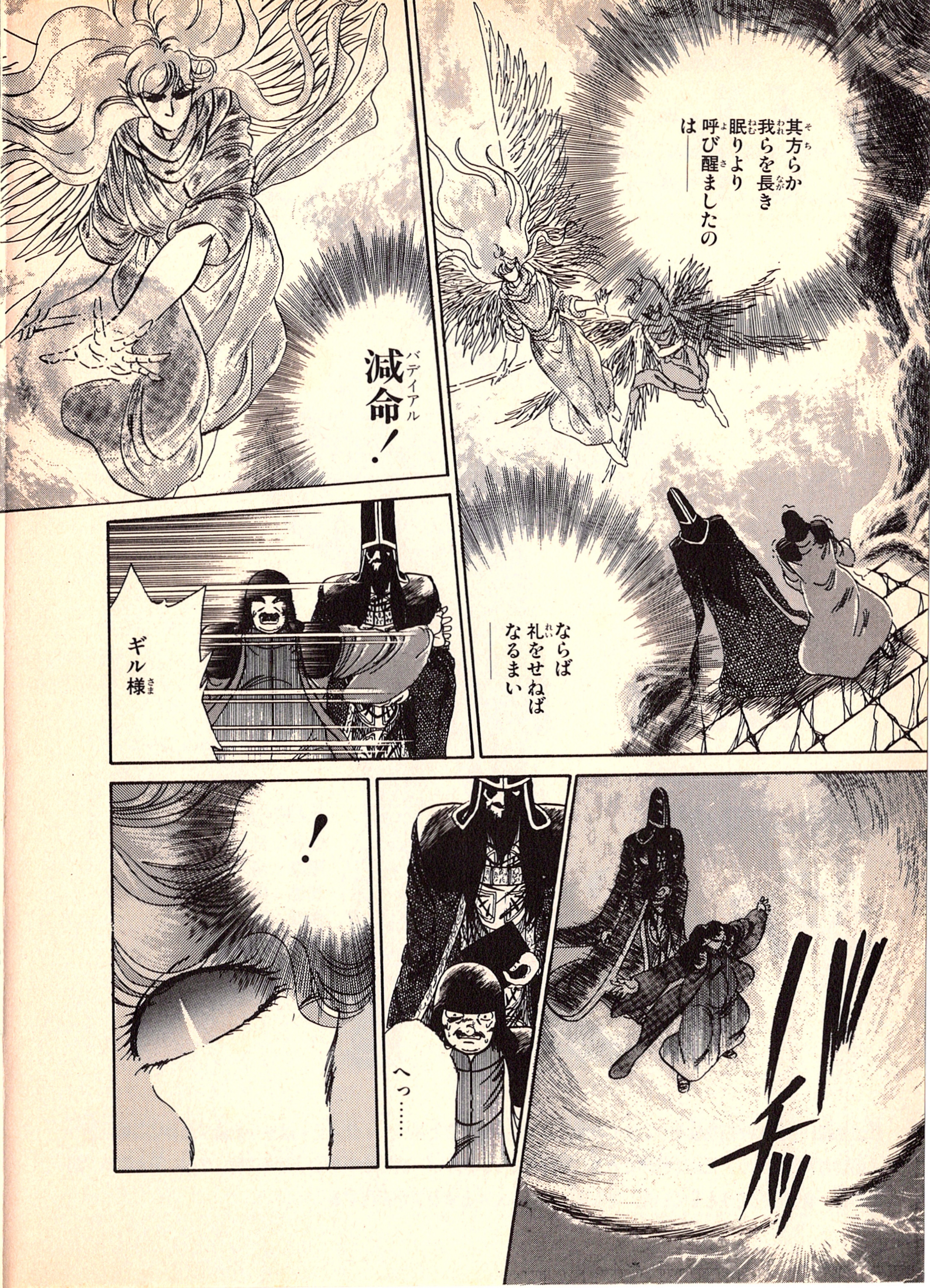
第3話「石化」

ウィザードリィ外伝

ギルの迷宮

ショウ
性別：男
職業：侍
属性：善
性格：実直
種族：人間族

邪法を用い世界の平衡を乱そうと企てる魔導士ギル。ショウとルーシィディティはギルを斃すためにこの迷宮へと召喚されたという。２人の仲間とともに死闘をくりかえす頃、魔導士ギルは「召喚の書」を用い新たなる「異界の者」を呼びだそうとしていた。そして、エンジェルとセラフが出現する……。

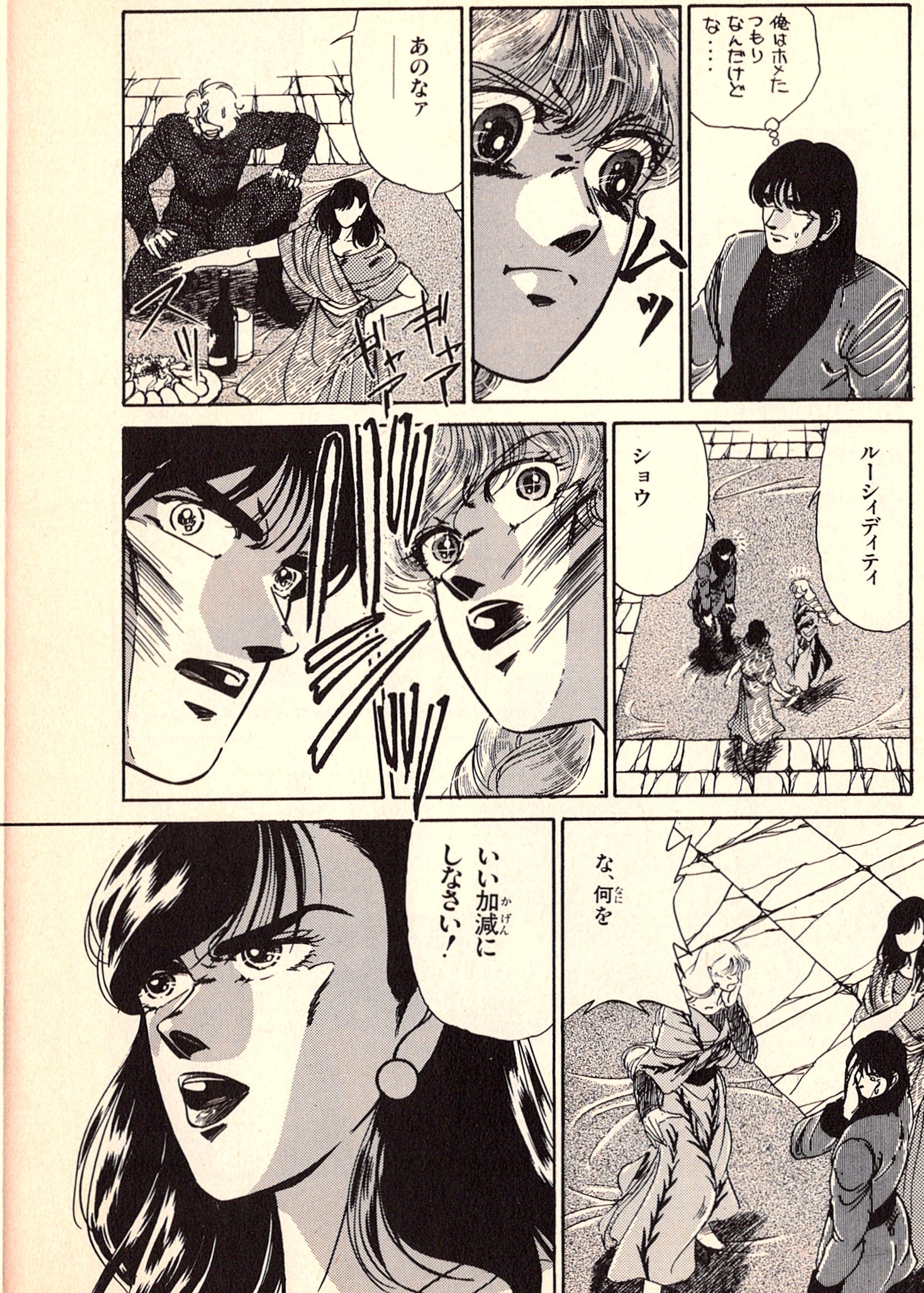

其方らか我らを長き眠りより呼び醒ましたのは――
滅命！
ならば礼をせねばなるまい――
ギル様
！
へっ……
バチッ


かつては人の心を食糧とし神の眷属として強大無比を誇った種族も
長き眠りによりその能力の大半を喪失したか……
それは——！
この書に記された契約に基づき我に助力せよ
——さすれば
古の栄光を再びその手にすることも不可能ではないであろう——



疲れたか？
ん――まあね………
化物との戦闘なんて生まれて初めてなもんだからな――
そうだろうな――
サンザ あんたはずいぶん手慣れているようだけど――
上からの命令一つで今日は東明日は西
あちらこちら旅から旅へ――
そうか忍者だったな……
化物じみた・・・奴らともよく出会ったもんだ――

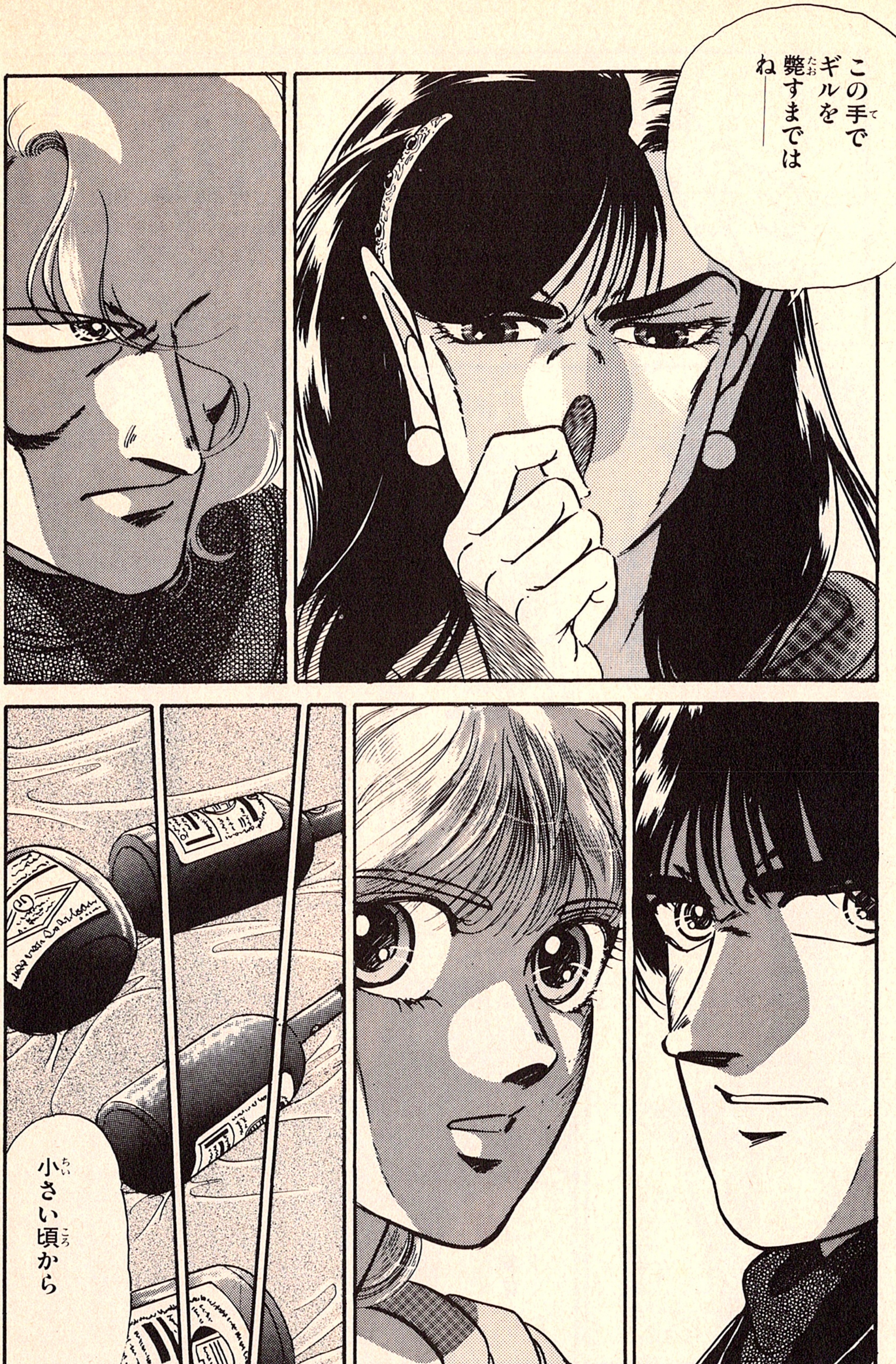

はい
お待ちどうさま
おーっ！来た来たメシだメシ！
すみませんシェーラさんと——
姫将軍の姫は飾りじゃないんだな——
悪かったわね
私も手伝って毒は入れてないわよ！
別に——
じゃあその目つきは何よ！
は
ん



俺はホメた
つもり
なんだけど
な・・・・
ムッ
あのなァ
ギャア
ギャア
ス
ッ
ルーシィディティ
ショウ
いい加減に
しなさい！
な、何を



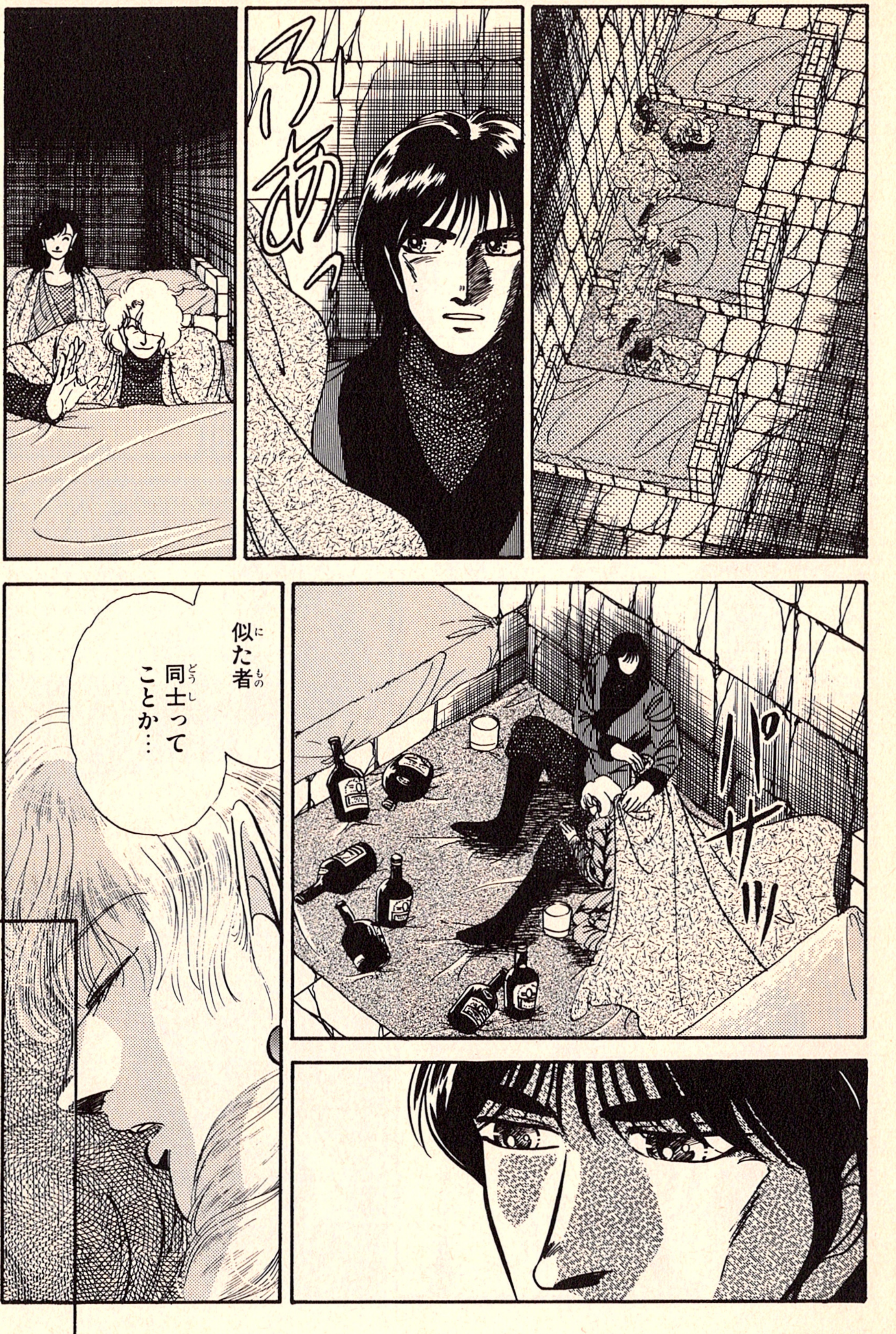
啀み合おうと殺し合おうとあなた達の勝手——
でも私はあなた達の兵卒じゃないわ
まして今のあなた達を配下の者が見たら
諍いの果てに命を落とすなんて冗談じゃないわ
どう思うかしら?
おみごと
別に——
私はまだ死にたくないだけ——

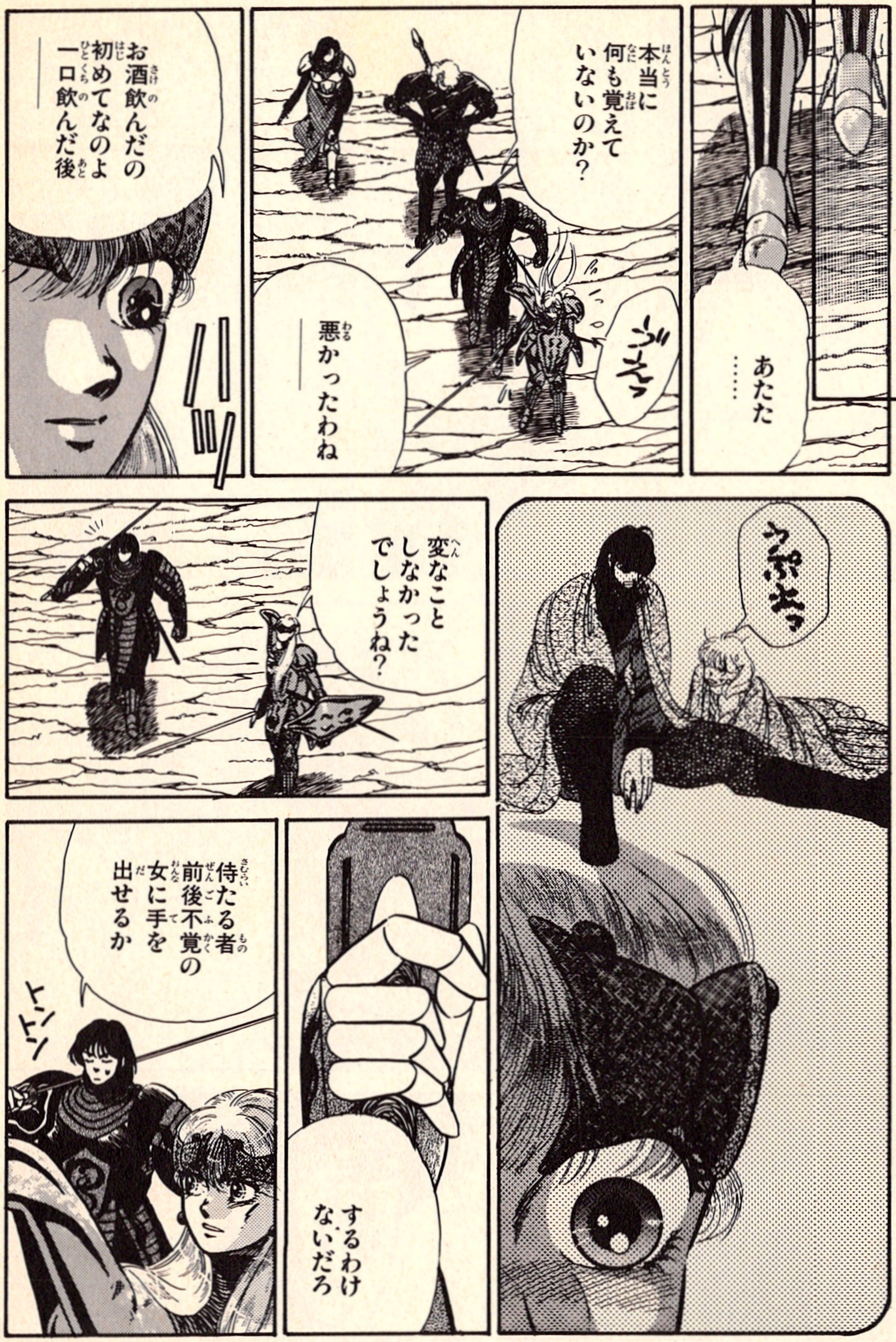

この手でギルを斃すまではね――
小さい頃から

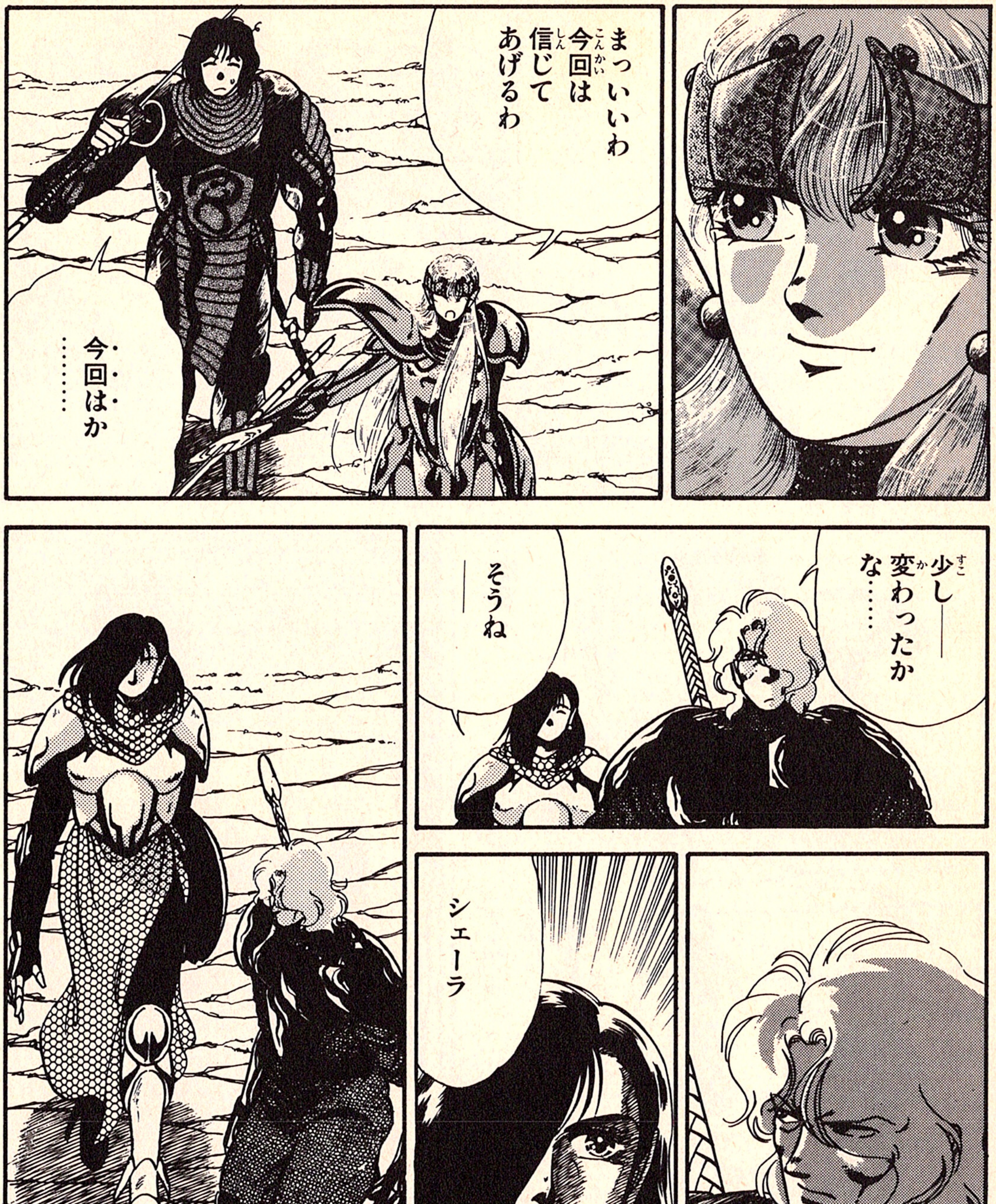

おまえが男だったらって繰り返し云うから
お父様の望み通り修業に明け暮れたあげく
諦めかけていた王子が誕生したら手の平を返して
今度は王女らしく振る舞えですって
酒癖ワリィな……
よほど鬱積していたのねェ‥‥
その時の私の気持ちわかる?
わかるさ

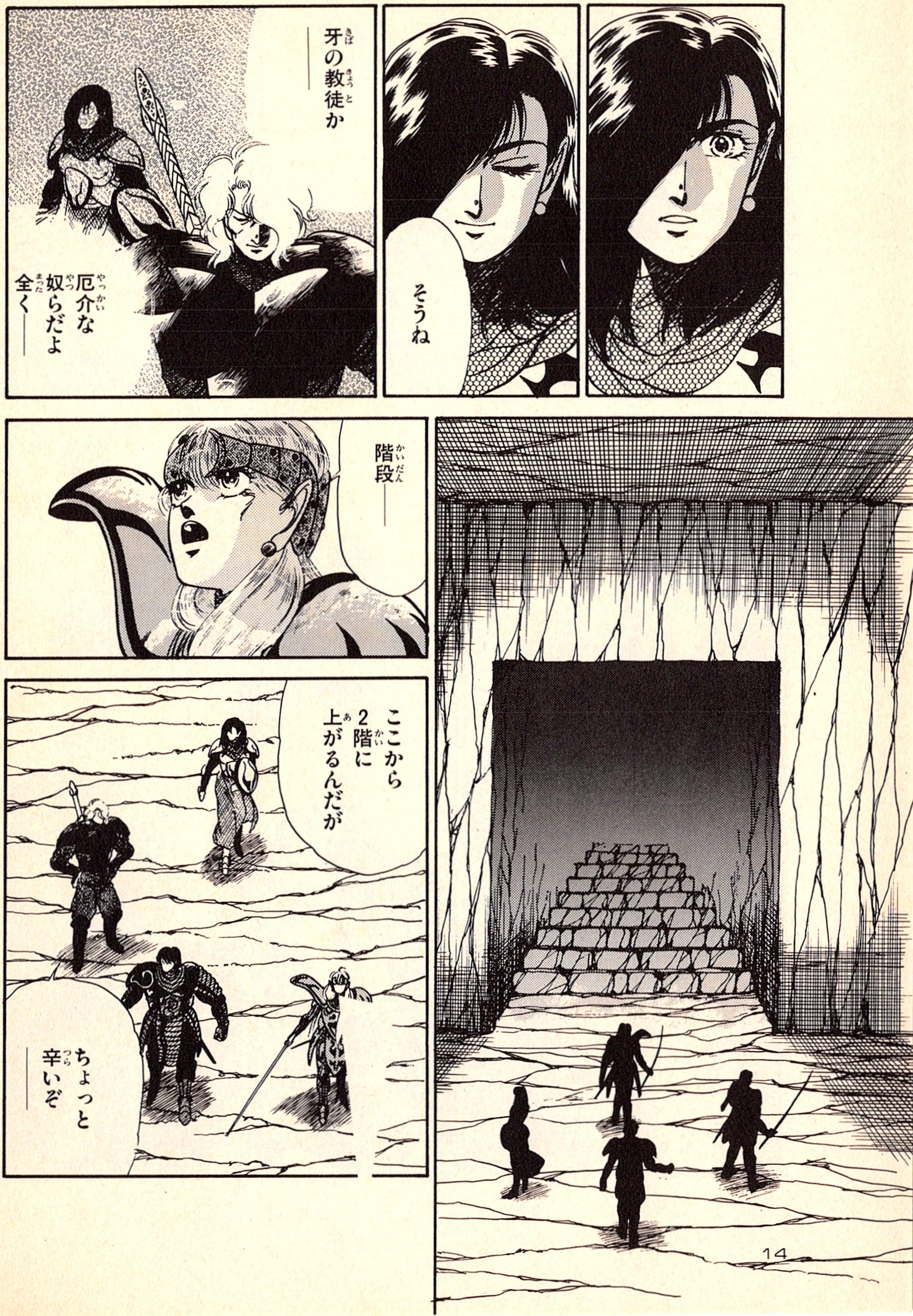


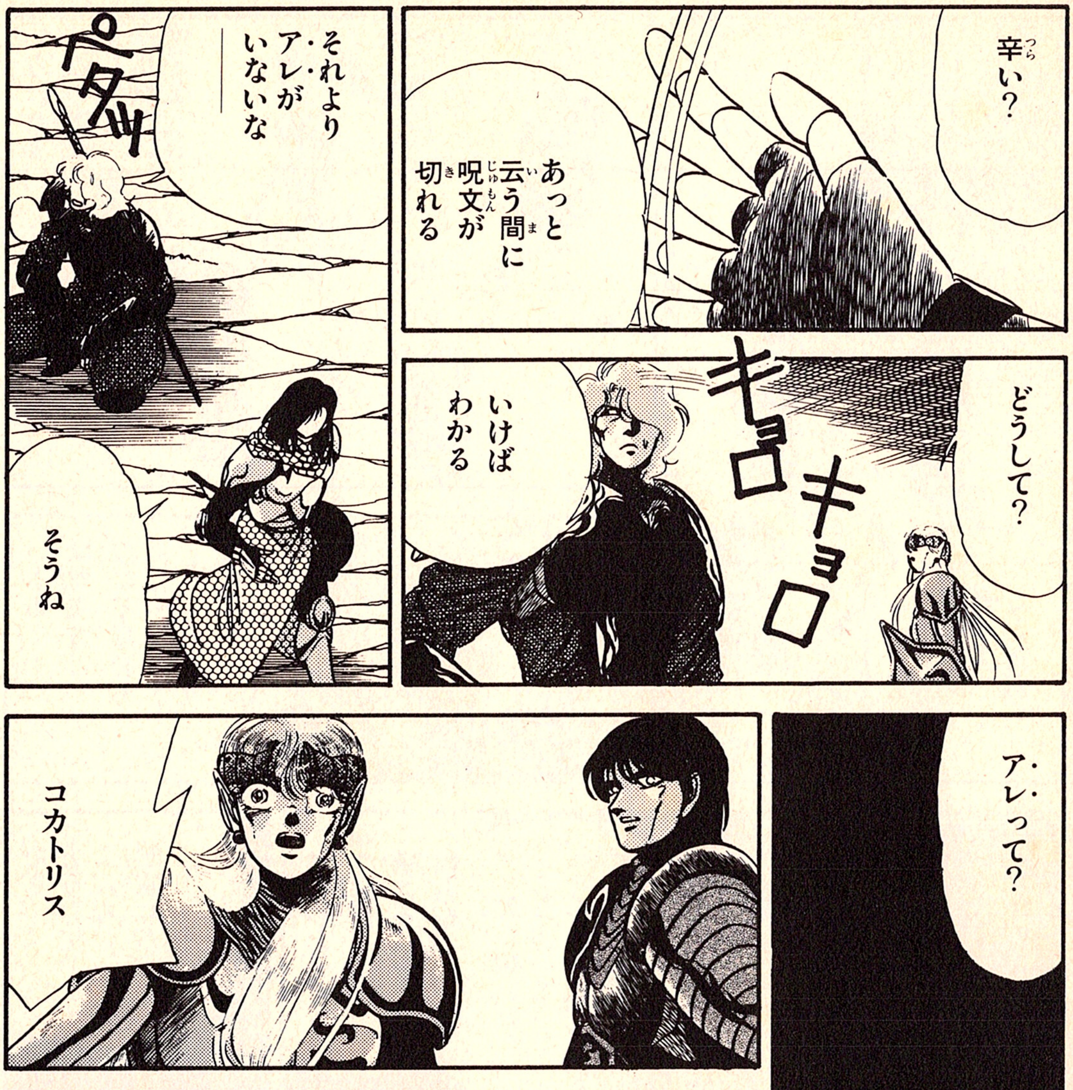
何がわかるのよ！
妾腹でしかも末子
継母には疎んじられ肩身の狭い想いを抱きながら育って
俺だって大差ない
今度の戦で兄貴達が討死して跡継ぎがいないから
ふあっ
俺が跡継ぎだとさ
こてん
笑わせるよな——ん


パサッ
似た者同士ってことか…


あたた……
本当に何も覚えていないのか?
悪かったわね
お酒飲んだの初めてなのよ
一口飲んだ後
変なことしなかったでしょうね?
するわけないだろ
侍たる者前後不覚の女に手を出せるか
トントン

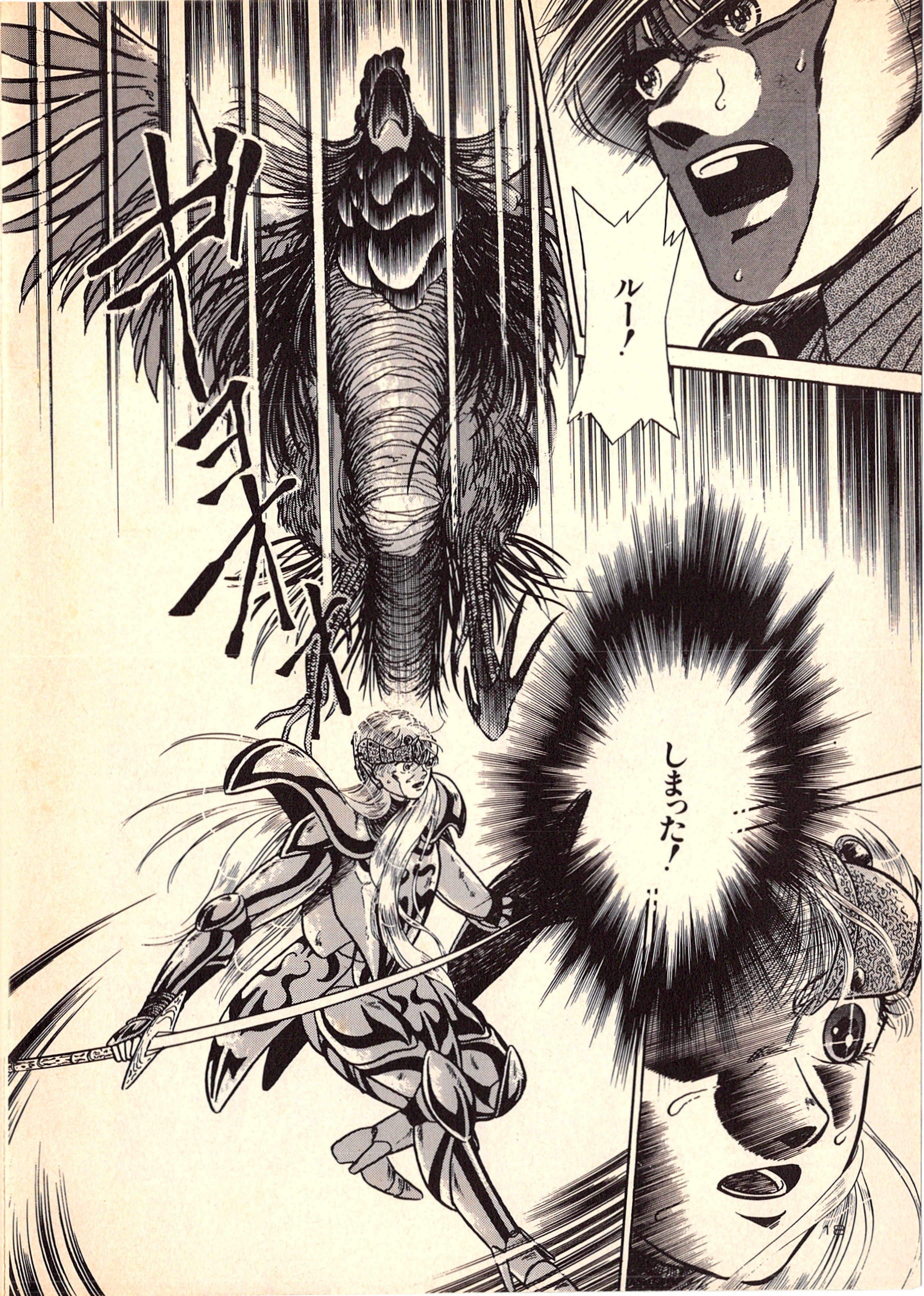

まっいいわ
今回は
信じて
あげるわ
今回はか……
少し──
変わったか
な……
そうね
──
シェーラ
落ち着いて
な──

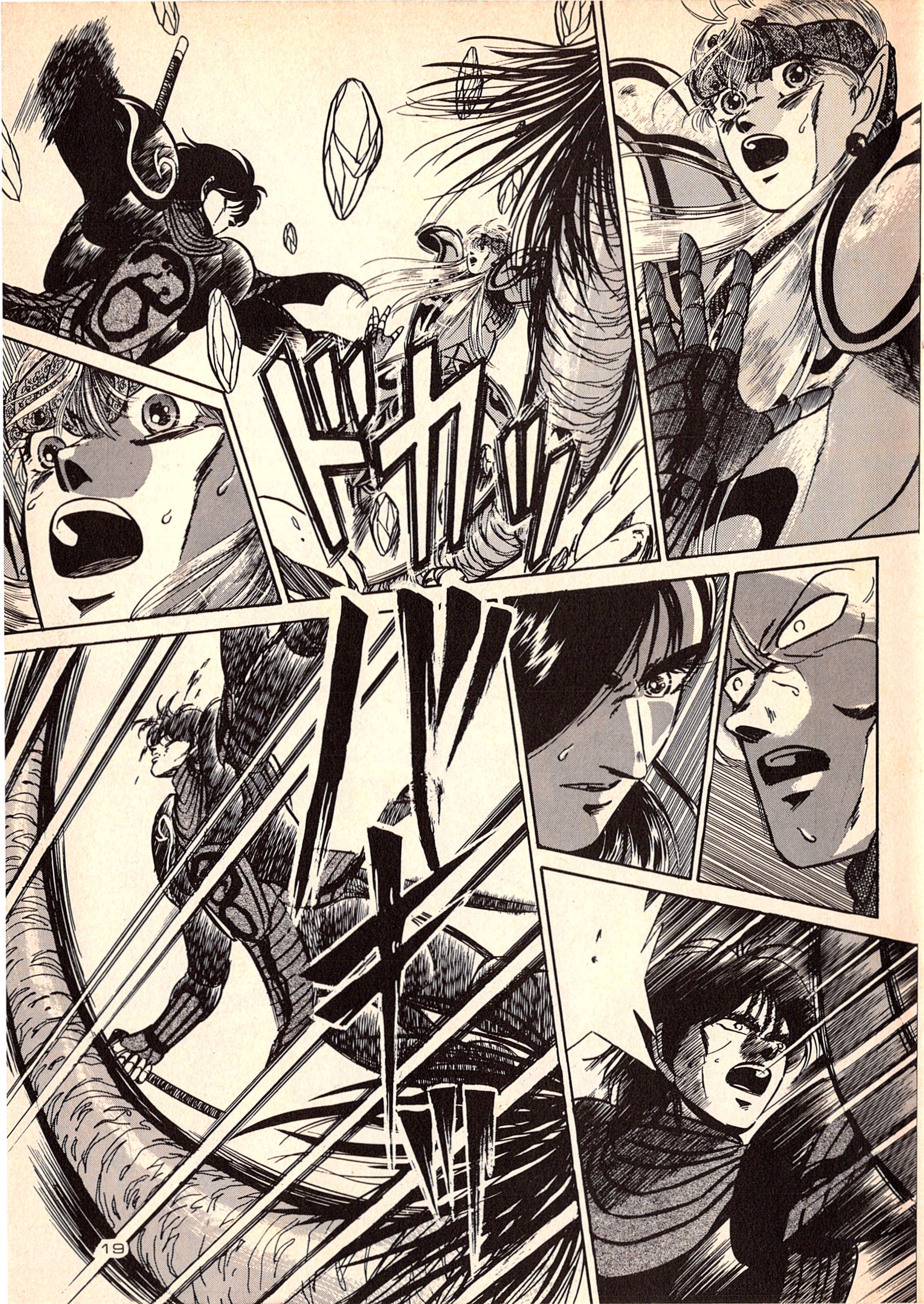

そうね
牙の教徒か——
厄介な奴らだよ全く——
階段——
ここから2階に上がるんだが
ちょっと辛いぞ——


辛い?
あっと云う間に呪文が切れる
どうして?
キョロキョロ
いけばわかる
パタッ
それより・・アレがいないな——
そうね
アレ・って?
コカトリス
コカトリス
南方の熱帯雨林に棲息するって話に聞いたことはあるけど——


いなけりゃ いない方が オレにとっちゃ ありがたい けどな……
石化された ことがあって な――
どーいう 意味？
ペシッ
いやぁ―― 以前南方で 奴に不意打ち くらって
どーも 苦手 なんだわ
でも どうして こんな 迷宮に？
どうやら 2階に 棲みついてる 奴らが 放し飼いに している らしいんだ これが……
ふえ
よーやるわ
でも 今まで どうして いたの？
恥しい 話だが


攻撃呪文にまかせるか
あたしあたし
逃げてた
笑うなっちゅうに！
くくく
くくく
くすくす


ルー！
ギョオォ
しまった！


ドカッ
バキッ

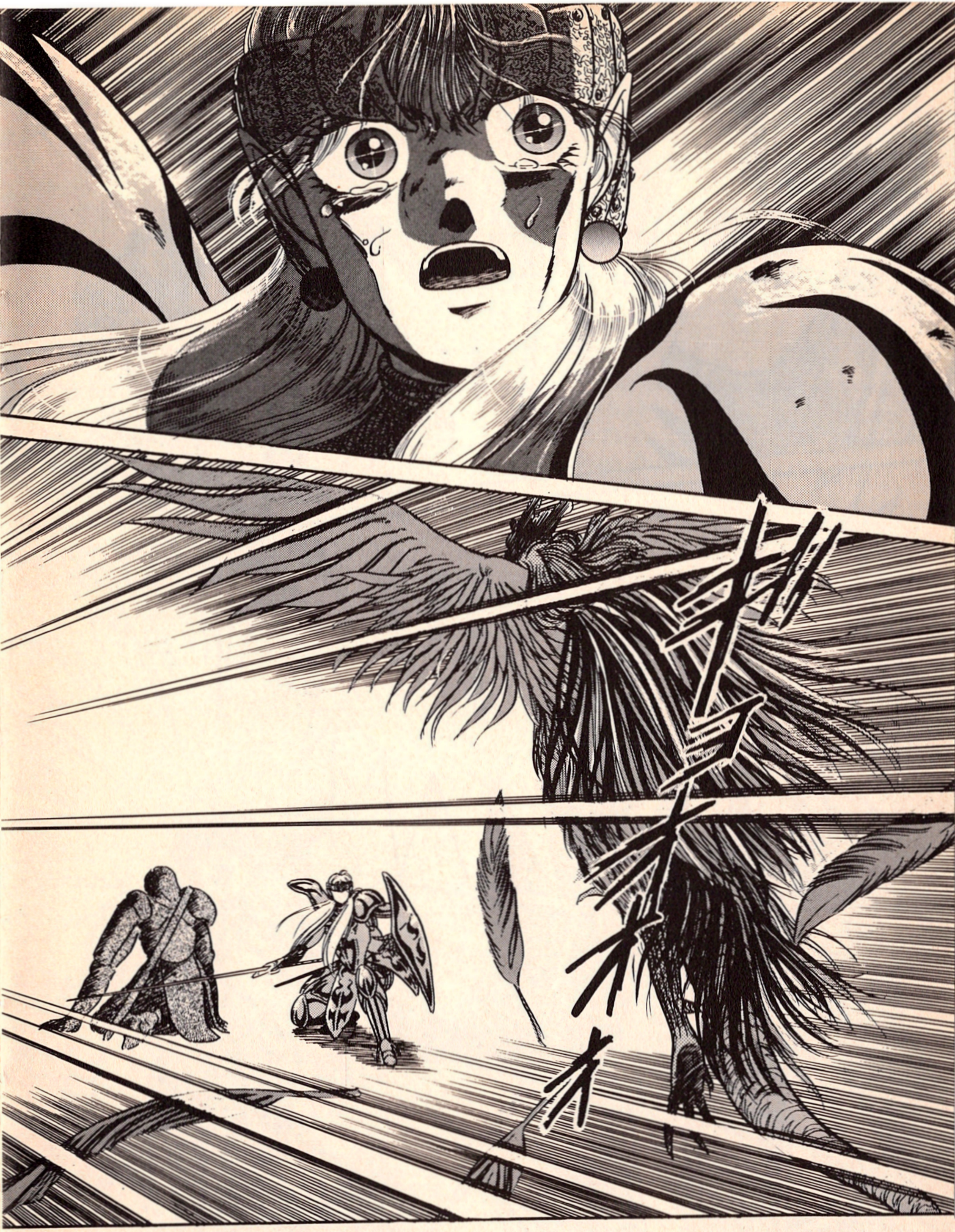


くっ!
!
いかん!
ショウ!


シェーラ！
わかってる！
猛炎（ラハリト）！


もう一匹だと!
キョオオオ
シェーラ!
姫将軍! ショウを!!
ダメ!


こんな時にまだ！
違うの！
私はまだ快癒を唱えることが――
できないの！



次号(Vol.23 11月17日発売)につづく!!

TO BE CONTINUED

風よ。龍に届いているか

第3回

リルガミン王国全土を容赦なく襲う
原因不明の天変地異の数々——
アルビシアの植民島は津波に飲まれ、
グニルダ寺院は地震によって崩壊した。
王国の滅亡の危機に、若き冒険者たちが立つ！



作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第三章〕異変

リルガミン王国は、大陸の西端に位置している。
実際に俺が歩いて確かめた訳ではないが、ともかくそう聞いている。東にはまだまだ広大な陸地が広がっており、とても人の足で横断できる距離ではないそうだ。
もっとも魔法の発達していた古代には、各地に設けられた転移地帯によって数百キロメートルを瞬時に移動することができたという。
現在知られているテレポートの呪文・転移での瞬間移動は、一回の行使で一キロメートルがせいぜいだ。しかも実体化する地点までの正確な距離がわかっていないと、地中の岩盤の中や空中高くに実体化してしまう危険もある。
おかげで今では、遥か東方の国々との交流は完全に絶たれている。侍と忍者の発祥の地といわれる大陸東端の島国などは、現存しているかどうかすら定かではないのだ。
だが、今は東の国々の状況を気にかけている余裕などはなかった。
リルガミン王国全土――そればかりではなく、情報を得られる限りのあらゆる西方世界が、原因不明の天変地異の脅威に晒されているのだ。
異変は、唐突に始まった。
リルガミン市の西には海が広がっている。
その西南の沖合二百キロメートルほどのところに、アルビシア諸島と呼ばれる大小十余りの島々がある。穏やかな気候と良質の漁場に恵まれた豊かな島で、三百年ほど前からリルガミン王国が開拓し、ダパルプスの支配した暗黒時代も平和を保ち続けた植民島だ。
周囲の海では珍しい海産物が多数獲れ、復興時には王国の重要な財源ともなった。ここ数年は大規模は移民が行われ、リルガミン市に次ぐ王国第二の都となった海上都市も存在する。十日に一度は連絡船が往復する、海洋にあって陸地以上に便の良い島だった。
その植民島が、突如として消失した。

リルガミンの人々がそれを知ったのは、南の浜辺の小村から報せが届いてからだった。
高波の翌朝、浜辺に多数の死体が砕けた木片とともに打ち上げられた。村の誰もが近海で船が沈没したと考えた。が、そうではなかった。
木片は船の破片ではなく、建物の建材の一部だった。中には酒場や宿の看板も混ざっており、それらに刻まれた文字ははっきりと、その店がアルビシアの海上都市にあったことを告げていた。
アルビシアの植民島に何らかの異変ありとの報せを受け、直ちに数隻の軍船が島の調査に向かった。アルビシア周辺にはガリアンと呼ばれる海賊が勢力を持っており、この連中による侵略の可能性が高かったためだ。
しかし、調査隊が目にしたのは海賊に占拠された都市ではなく、植民地が文字通り消えている様だった。
島自体はいつもと変わらぬ位置にあった。
ただ、それがアルビシアの島々であることを確認するのに、船団は群島の周囲を一周しなくてはならなかった。
それほどまでに、島の景観は一変していた。
アルビシアの本島は、中央に緑の木々に包まれた丘陵部を持つ美しい島だった。だが、そこにあったのは地肌が剥き出しになった、見るも無惨な岩と土塊の島だったのだ。
他の島も同様だった。小さい島の中には、ほとんど海中に没してしまいそうなほど陸地を削り取られているものもあったという。
都市を始め、人々が築き上げた文明の痕跡は何処にも残されていなかった。
津波だった。
それも、想像を絶する大津波がアルビシア諸島を襲ったのだ。
島の人々は、恐らく津波に気付く間もなかったのだろう。水圧の壁は

風よ。龍に届いているか

一瞬にして島々を呑み込み、その表皮を洗い流したのだ。

アルビシアの壊滅が、リルガミン史上三度目の危機の幕開けとなった。

天空に垂れこめた黒雲が陽光を遮り、日ごとに気温が下がり始めた。

雲より降り注ぐ雷の束は無差別に大地を灼き、人々の生命を奪った。

幾つもの町が廃墟と化し、その数倍の村の音信が途絶えた。

相次ぐ地震によって大地はひび割れ、そこから吹き出した瘴気は緑の草原を不毛の荒野へと変えていった。

しかし――。

この期に及んでもまだ、リルガミン市の市民は平和な夢を見続けていた。

たとえどんな災害が起ころうとも、グニルダの杖の力は自分たちを守ってくれる。魔神マイルフィックの大厄災からも、リルガミン市だけは助かったではないか――と。

そしてその甘い夢想は、いとも簡単に、完全に打ち砕かれることとなった。

激しい地震がリルガミン市を襲った。幸いにも市街に大きな被害は出ず、人々はこれも杖の働きであろうと考えた。

だが、地震の際に都市の北の一画で起こった事件が市内に伝わるや否や、市民の多くは言場を失い、残りは恐怖と不安で泣き叫んだ。

本来なら最も杖の力によって護られている筈の場所――王国の守護神グニルダとその杖自体を祀っているグニルダ寺院が、こともあろうに倒壊していたのだ。

それは、この天変地異に対してはグニルダの杖の防護魔法も完全ではないということを、否が応でも見せつける出来事だった。

史上類を見ない特異な天災の原因究明に、リルガミンの賢者たちはようやく真険に取り組み始めた。

星々の位置から現在の状況を読み取る占星術や、地霊や風霊を呼び出す精霊召喚。果ては不完全ながらも古代呪術の復活による高次空間への干渉や、ダパルプスの支配時に焼き捨てられずに残されたわずかな古文書の解読にまで、賢者たちの原因追求の手は伸びた。

しかしそのいずれも、満足な解答を導き出すには至らなかった。

その間にも、事態は悪化の一途を辿った。

リルガミンの食糧庫ともいうべき南部地方の穀倉地帯は、落雷による火災と日照時間の大幅な減少によってすでに壊滅的な打撃を受けていた。元々豊かなリルガミンではいくらかの蓄えがあるものの、それも長くは持つものではない。

アルビシアの壊滅以降、豊富な海産物の収獲もぱったりと途絶えた。連日のように荒れ狂う海には船も出せず、沿岸の漁民はいち早く都市へと避難してしまった。

牛や羊の放牧も、異常気象の影響で牧草が枯れ、その大部分が飢え死にした。食用となる家畜類は、もはやほとんどいないといって良かった。

天変地異が治まらぬ限り、いずれ深刻な食糧不足に襲われることは間違いなかった。家畜ばかりか、人も飢餓に苦しみながら死んでいくだろう。

また、そうなる前に大災害の直撃により、リルガミンは滅亡を迎えるかも知れなかった。

いずれにせよ、座して待つばかりでは遅かれ早かれ王国は滅ぶ。そこで賢青たちは最後の賭けに出た。

伝説の神秘の宝珠――グニルダの杖と同様、神々の手によって創り出されたとされるこの神器は、森羅万象の理すらも映し出す絶対的な情報収集の魔力が秘められているという。

この宝珠さえ手に入れることができれば、天災の原因も必ず判明すると賢者たちは考えたのだ。

しかしそれはあくまで伝説上の神器で、本当に存在したのかどうかはそれまで定かではなかった。口承で伝えられるのみで、実在を示す文献などが発見されていなかったためだ。

ところが偶然にも、異変の原因解明のために賢者の一人が解読した古文書の中に、この宝珠の実在を裏付ける詳細な記述が残されていた。そればかりか、現在宝珠が隠されているであろう場所も、古文書には記されていたのだ。

それは、あたかも運命のようだった。

宝珠の所在地は、リルガミン市のすぐ傍らだったのだ。

リルガミン市の北、元は草原だった荒野の中央に魔塔の如く聳え立つ岩山。霞んで見える山頂から、絶え間なく噴煙を吐き出し続けるこの奇妙な火山に、伝説の宝珠が隠されているのだ。

都市の城門から十キロメートルと離れてはいない。にもかかわらず、古来より魔の棲む、また聖なる地として近づく者のなかった山だ。

古文書によれば、山頂にほど近い高みにある洞窟に宝珠はあるという。だが、この岩山の四方は切り立った断崖に囲まれ、とても登攀できたものではない。外側から宝珠に辿り着くのは不可能、と断言してもいいだろう。

山というよりは、まさしく塔なのだ。

塔の最上階に出るには、外壁を登ったりはしない。内部にある階段を使い、上の階へと昇っていく。

この岩山では、内部に掘り抜かれた六層の迷宮が登山道の役割を果たしていた。

つまり宝珠を手に入れるには、凶暴な魔物の徘徊する迷宮を突破し、最上層へと昇りつめなくてはならないのだ。

しかも、この神秘の宝珠は強大な力を持つ存在によって護られていた。

巨龍ル，ケブレス。

こいつが迷宮の主であり、宝珠の守護者だ。

もちろん、ただのドラゴンじゃあない。噂では神話時代から生き続けている竜神で、この世界を支えている大蛇の五匹の子供のうちの一匹だということだ。

その魔力たるや、少々魔法をかじった程度で大魔導師をきどっている火竜などの比ではない。何しろ山中の広大な迷宮全域を、ル，ケブレスの張った特殊結界が包み込んでいるのだ。

この結界の性質は、グニルダの杖の魔法障壁に極めて近いものだ。杖の力が人の心の内側に潜むリルガミンへの悪意を看破したように、ル，ケブレスの敷いた結界はその者が従う戒律——善か悪かに対して反応するのだ。

悪の者が善の結界、また善の者が悪の結界に入り込もうとすると、その強力な魔法障壁はたちどころに効力を発揮する。その者の肉体を迷宮の外、つまり岩山の南面にある例の亀裂の外に転移させてしまうのだ。

しかし、妙な話だ。

これほどの力があるならば、何者をも宝珠に近づけぬようにするのもた易かろう。本気で宝珠を護るつもりなら、それがル，ケブレスの取るべき最良の方法だ。

そこから推測するに、どうやらこの竜神は必ずしも宝珠の探索者に敵意を抱いているという訳ではないらしい。ただしそう簡単に宝珠を渡す気もないようだ。

ル，ケブレスは世界の平衡の守護者であるともいう。思うに奴は、神秘の宝珠の力が善と悪の均衡を破るのを恐れているのだ。もし宝珠の情報収集力が噂通りなら、確かにそれだけの力はある代物だ。

それ故に、善悪の結界がある。

この世界に生活する者は、大きく分けて二つの性格に分類される。自己犠牲と博愛の精神に満ちたお人好し、俺にはとても理解できない戒律を持った善と、生き残るためにはどんな努力も惜しまず、自分の心に正直に生きる悪だ。

善悪と呼んではいるが、これは決してその存在そのものを表す言葉じゃない。悪しきもの、という意味ではどれだけ人間やエルフが頑張ってみたところで、悪魔や亜人種どもの生来の邪悪さには太刀打ちできるものではないのだ。

とはいえ善と悪は相反する性格であることは事実で、その思考や行動規範の根本的な相違から、異なる性格の両者が上手くいくことはまずありえない。特に指向のはっきりした冒険者同士では、パーティを組むどころか酒場で同席しただけでも争いになってしまうものなのだ。

夫婦仲が悪いなどというのも、まず大半はこの性格が原因だ。ただ、ごく普通に平和な生活を営んでいる者は自分の性格がどちら寄りなのかも気づかないことが多く、いい加減何年も顔を付き合わせ続けてからよ

風よ。龍に届いているか



うやく自分たちの間違いに気づく、という訳だ。
まあそれはともかく、ル，ケブレスはこの善悪いずれかの方向に宝珠の力が暴走してしまう危険を憂えている。伝説の時代から生き続ける竜神にしてみれば、種族自体が歳若い人間たちに宝珠を預けるなど、危なっかしくておいそれとはできないだろう。
だが、人々が天変地異によって死に絶えていく様を傍観するのも奴の本意ではない。
そこで、山頂に至る唯一のルートである迷宮に、奴は善悪それぞれの魔法障壁を張り巡らした。そして迷宮を突破するためには、善と悪の戒律を超えた協力が必要となっていた。
これはル，ケブレスの挑戦であり、かつてグニルダ神がリルガミンの民に課したような試練だった。
ル，ケブレスの召喚した多数の怪物に斃されることなく迷宮を突破し、善悪の協調がなされた証を示した時、宝珠を手にするだけの価値が人類にあると認められるのだ。
危急の際に何とも傲慢なル，ケブレスの試練だったが、もとよりリルガミンの人々はこれに従う他に道はなかった。
すぐさま軍隊が迷宮へと送り込まれた。戦闘訓練を充分に受けてきた兵士の人海戦術に、人々は宝珠はすぐにでも手に入るだろうとの楽観的な予想を立てた。
だが、結果は無惨なものだった。彼らを兵士と呼ぶには、余りにも平和の時代が長過ぎたのだ。
いくら数百人の大部隊で行動しようとも、狭い迷宮の中で一時に戦えるのは数人が限度だ。ろくに実戦経験のない兵士たちは怪物の奇襲による混乱の中で次々と分断され、その飢えた胃袋の中へと収まっていった。
ほうほうの体で外に脱出した時には、兵士の数は出発時の半数にも満たなかった。善悪の協力どころか、魔物の群れを突破することすらままならないのだ。このまま再度軍隊を出動させても、探索の失敗は目に見えていた。
そこで賢者たちは過去に行われた名高い迷宮探索と同じ方法に切り換えた。
それはつまり、迷宮内で最も指揮に混乱を来たさずに機能するといわれる六人パーティで、自らを鍛え上げながら少しずつ迷宮を踏破していくやり方だった。かつてワードナの迷宮ではこうして数多の英雄が生まれ、ダパルプスの呪いの穴でも同様にしてグニルダの杖が取り戻された。
時間を要する方法だが、こうなっては他に手段がない。急ぎ各地に冒険者を募る布令が出され、かつての英雄の子孫たちにも召集がかけられた。
俺の御先祖も冒険者だった。それもあのワードナの迷宮で心身を鍛えた強者だったらしい。
らしい、というのは、実のところそれを証明するものが俺の家系には何も残されていないからだ。幾度でも蘇ったというワードナを斃した冒険者は数多く、彼らは狂君主トレボーから近衛隊の袖章を受けているのだが、それが我が家には伝わっていない。
もっともこの袖章は戦争好きのトレボーが有望な兵隊を掻き集めるための手段で、狂王の死後はさして価値のある代物ではない。ちなみに一時は無敗の軍勢を率いて西方世界に戦乱の渦を巻き起こしたトレボーだったが、ワードナの迷宮探索以後は一度も戦士を起こさずにその生涯を終えたという。
まあ、俺にとっては御先祖がワードナと戦っていようといまいと、そんなことはどうでもいいことだ。要はその御先祖から受け継いだ職業が、通常では他のクラスで心技体を磨き抜いてからでなければ転職できない特殊なエリートクラス・忍者であり、その独特の戦闘技術が幾度となく俺の命を救ってくれたということなのだ。
俺の他にも、百年前の先祖のおかげで高い資質を持って生まれてきた者たちがリルガミンに集ってきた。英雄の子孫ではないものの、死の危険がつきまとう迷宮に敢えて挑もうという覇気のある者も集まり、冒険者は少なくない数となった。
こうして開始された冒険者による迷宮探索は、相当数の犠牲者を出しながらも着実に進んでいった。天変地異の脅威の前にパーティ間の協力が頻繁に行われ、迷宮内の正確な地図がかなり早いペースで作られたの

がその要因だったのだろう。

そして一年。

天変地異が半年ほど小康状態を保っていたおかげで、リルガミンやその周辺の国々の被害はそれほど拡大してはいない。この小康が嵐の前の静けさだという不穏な流言もあるにはあるが、今のところさし迫った危機感は薄れている。

食糧も徹底した配給制を敷いたおかげで、少なくとも市内では飢える者は出ていない。まだしばらくは持つというのがもっぱらの噂だ。

そして、宝珠の探索はいよいよ詰めの段階を迎えていた。

最上層を除く五層の迷宮は、ほぼ完全な地図作りがなされている。要所要所に設けられた罠や歪められた空間、それに通行を妨げる結界の謎もすべて解明された。

数多くの危地を乗り込え、現在も生き残って探索を続けている冒険者は、総数こそ著しく減少したもののどれもマスタークラスか、それを目前にした熟練の猛者ばかりだ。今なら一部隊で、下手な軍隊以上の働きをするだろう。

あとは最上層に待つル・ケブレスと対面し、宝珠を見つけ出すばかりとなったのだ。

回想が、少々長かったようだ。

夕陽はすでに水平線の向こうに沈みきっていた。残光に浮かび上がる風景は、忍び寄る闇に刻一刻とその色彩を失っていく。

俺は岩山と荒野を結ぶ長いスロープを下り始めた。下り終えるまでには、周囲は漆黒の闇に包まれていることだろう。

その時俺は初めて、荒野の中ほどの砂煙に気づいた。

岩山の麓からリルガミン市へと続く、荒野を突っ切る一本道。

それは、こちらに向けて疾走する一台の馬車が巻き上げる砂塵だった。

（次号につづく）

あとがき

おおう。

前号のあとがきで、次回はいよいよ主人公以外のキャラクターが登場する、と書いたのだが、御覧の通り出なかった。

最後の最後にそれらを乗せた馬車が見えるのだが、これで登場したといい張るほど僕は面の皮が厚くないのだ。

これはみんな回想の長い主人公が悪い。

もしくは僕に憑いている言霊が悪い。

そんないい訳が通る筈もない。

まあ次号では必ず出る、ということで……。

それはさておき、ようやく北海道から帰ってきた。

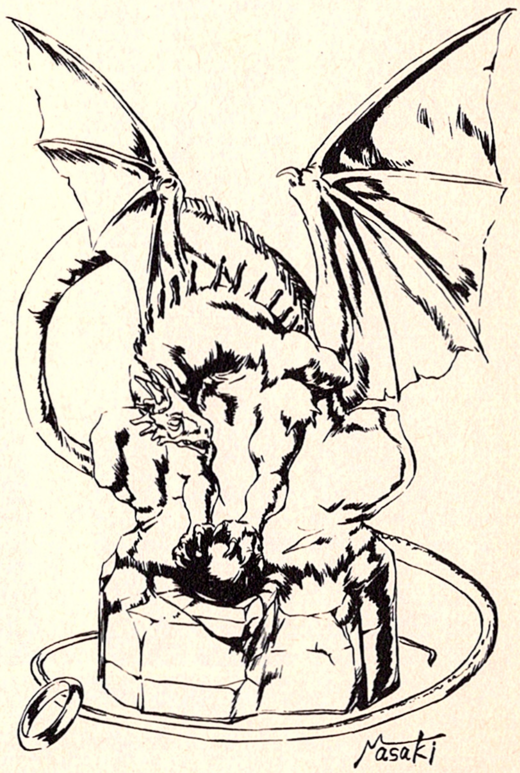
十月十日のウィザードリィフェスティバルの前夜に、何とか辿り着いたのである。

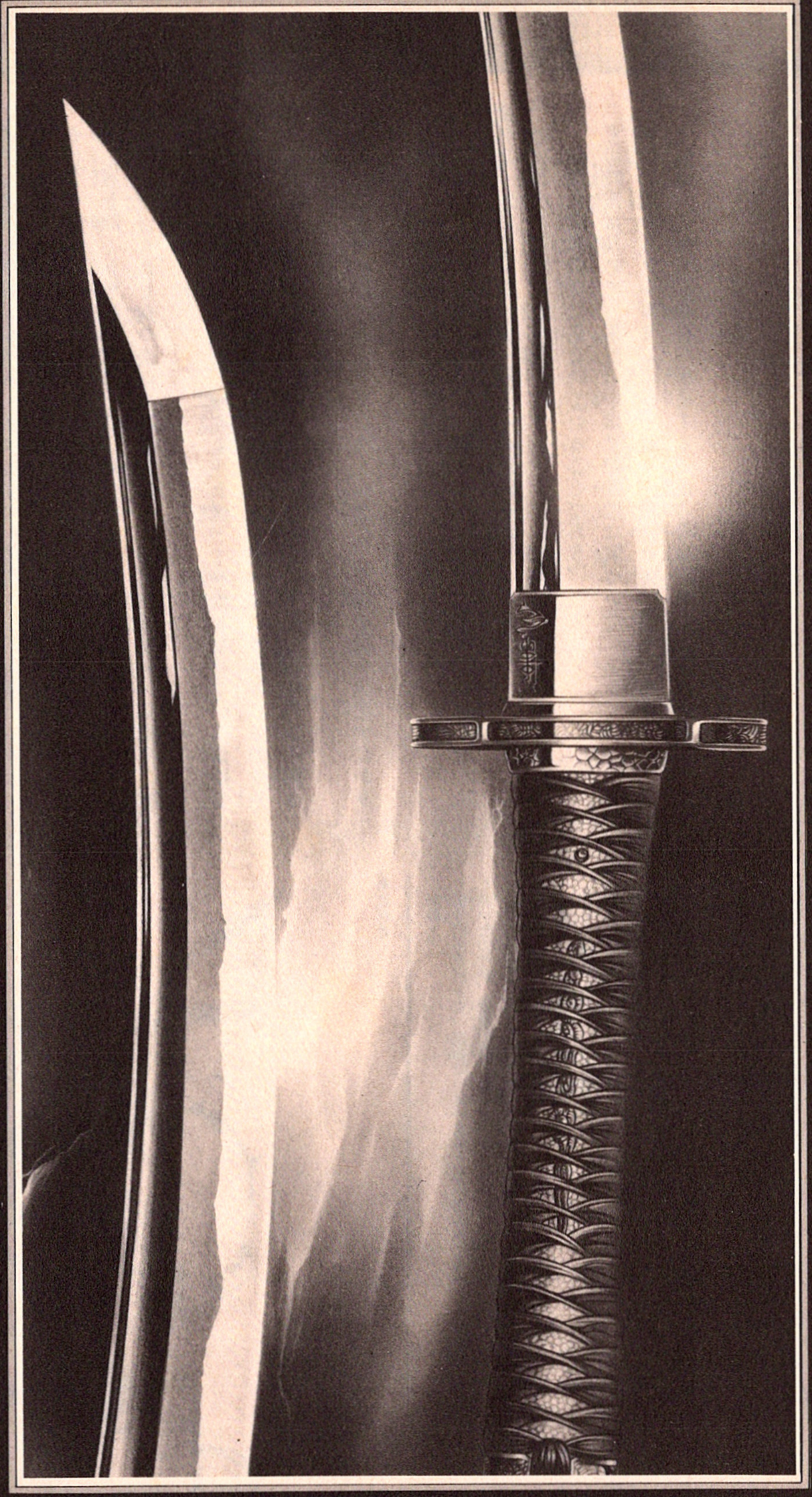
ほぼ五十日間に及ぶ、長い旅行だった。

これでしばらくは、遊び抜きで仕事に専念しなくてはならない。

励ましのお手紙を待っております。

それでは次号、刮目して待て！





●コミック版
ウィザードリィ外伝
——ギルの迷宮
作／石垣環

●小説ウィザードリィII
風よ。龍に届いているか
作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

▶コミック版ウィザードリィ外伝・ギルの迷宮は反対ページ(P84)からお読み下さい。